

プロフィール

エヴァ・ゲヴォルギヤン ピアノ

Eva Gevorgyan, Pianist

「雄弁な感情表現と完璧なテクニック、達人の特質のすべてを併せ持っている」(ICMA 国際クラシック音楽賞)、「エミール・ギレリスやベラ・ダヴィドヴィッチといったロシアの巨匠を思い出させる」(グラモフォン誌)と評されるエヴァ・ゲヴォルギヤンは2004年に生まれ新世代で最も期待されているピアニストのひとり。



2021年の第18回ショパンコンクールでは最年少ファイナリストの中で円熟さを感じられる重

厚な表現と鋭い感性、鉄壁のテクニックで会場の聴衆と世界中のリスナーを虜にした。

モスクワ音楽院の名門中央音楽学校でナタリア・トゥルル教授に学ぶとともにロシアン・ピアノリズムを代表する巨匠たちに師事。エフゲニー・キーシンやデニス・マツエフなどの支援を受け研鑽を積んできた。天才少女として各国の元首に演奏を披露している。

数多くの受賞歴の一例をあげると、セント・チェチリア国際ピアノコンクール第1位、ジュリアーノ・ペカール国際ピアノコンクールグランプリ、青少年のためのショパン国際ピアノコンクール(ポーランド)第1位、ヤング・ショパン国際ピアノコンクール(スイス)第1位、ロベルト・シューマンピアノコンクール第1位、シカゴ国際コンクールグランプリ、クレーヴランド国際ピアノコンクール第1位、エスベルクホフクラシックピアノフェスティバル優勝、ロシア国立交響楽団によるコンクールグランプリなど50を超える。

「あとが大事」と言われるショパンコンクールにおいて現在のエヴァの演奏活動は際立っており、モスクワ音楽院、スペインのクイーン・ソフィア高等音楽院に在学しながらロシア、ドイツ、スペイン、フランス、アメリカなどで月に数回ものコンサートに出演、2023年初来日公演の成功は記憶に新しく、コンチェルト、リサイタルはもちろん室内楽、歌曲の分野においても傑出した音楽性を発揮している。

2024年公演は小林研一郎指揮読売日本交響楽団とラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番、ユベール・スダーン指揮札幌交響楽団とチャイコフスキー：ピアノ協奏曲第1番を共演するとともに全国主要都市でリサイタルを開催。

2024年8月、再来日に合わせて2023年初来日公演のライブCD「Chopin Rachmaninov」(2枚組)をアルトゥス、キングインターナショナルからリリース。



EVA GEVORGYAN
Piano Recital

エヴァ・ゲヴォルギヤン ピアノリサイタル

2024年9月8日(日) 開演15:00

秋篠音楽堂

お問い合わせ

秋篠音楽堂 TEL 0742-35-7070 (10:00~17:00)
〒631-8511 奈良市西大寺東町2-4-1 ならファミリー6階
<https://akishino-ongakudo.com/>

主催 秋篠音楽堂運営協議会

プログラム

ベートーヴェン／ピアノソナタ第27番 ホ短調 op.90

- 第1楽章 速く、そして常に感情と表情をもって
- 第2楽章 速すぎず、そして十分に歌うように

ブラームス／4つの小品 op.119

- 第1曲 間奏曲 口短調
- 第2曲 間奏曲 ホ短調
- 第3曲 間奏曲 ハ長調
- 第4曲 ラプソディ 変ホ長調

ラヴェル／ラ・ヴァルス

— 休憩 —

シューマン／謝肉祭 op.9

- 第1曲 前口上
- 第2曲 ピエロ
- 第3曲 アルルカン
- 第4曲 高貴なワルツ
- 第5曲 オイゼビウス
- 第6曲 フロレスタン
- 第7曲 コケット
- 第8曲 返事
- 第9曲 蝶々
- 第10曲 A.S.C.H-S.C.H.A（踊る文字）
- 第11曲 キアリーナ
- 第12曲 ショパン
- 第13曲 エストレラ
- 第14曲 再会
- 第15曲 パンタロンとコロンビース
- 第16曲 ワルツ・アルマンド
- 第17曲 告白
- 第18曲 プロムナード
- 第19曲 休憩
- 第20曲 フィリシテ人と戦うダヴィッド同盟の行進

チャイコフスキー（プレトニョフ編曲）／組曲「くるみ割り人形」

- 行進曲
- 金平糖の踊り
- タランテラ
- 間奏曲
- トレパーク
- 中国の踊り
- アンダンテ・マエストーソ

曲目解説

ベートーヴェン（1770～1827）：ピアノソナタ第27番 ホ短調 op.90

1814年作曲。2楽章構成という短めの作品であるがベートーヴェンの後期に向かう時期のピアノソナタとして重要視されている。中期から後期に移るなかで楽想やテンポなどの指定がドイツ語で表記されるようになり、自分の思いをより具体的に伝えようという意思が示されている。第1楽章はソナタ形式。「速く、そして常に感情と表情をもって」と書かれ、最初の和音はあたかも新たな境地に向かう暗示にも聞こえる。続くドルチェのメロディとで第1主題を形成する。次に口短調の第2主題に移り、展開部、再現部を経て第1主題によるコーダで終わる。第2楽章は「速すぎず、そして十分に歌うように」と記されたロンドソナタ形式。息の長いメロディックな楽章であり、ベートーヴェンに続くシューベルトのピアノソナタホ短調 D.566に多大な影響を与えたと言われている。

ブラームス（1833～1897）：4つの小品 op.119

1893年作曲。ブラームスは最晩年になって op.116、op.117、op.118そしてこの op.119の4つの曲集を作曲し、本日演奏される「4つの小品」が最後のピアノ作品となった。以前に作曲されたものも含まれているようであるが、年老いたブラームスがこれらの小品に過ぎ去った昔に寄せる懐かしさや悟りの気持ちを込めているのが感じられる。第1曲「間奏曲」口短調はあいまいな調性で始まり中間部では明るさや温かさを感じるものの全体が憂鬱そして諦念に包まれている。第2曲「間奏曲」ホ短調はリズムの変化やシンコペーションなどによって第1曲とは趣の異なる不安さや動揺を感じさせる。第3曲「間奏曲」ハ長調は優雅な軽やかさ、リズムの変化によっておどけた雰囲気も感じられる。第4曲「狂詩曲（ラプソディ）」変ホ長調は堂々とした厚みのある曲調で始まり前の3曲とは異なる雰囲気。最後はホ短調で閉じられる。

ラヴェル（1875～1937）：ラ・ヴァルス

「ラ・ヴァルス」（ワルツ）はラヴェルが舞踊詩として1919年から1920年にかけて作曲したオーケストラ作品であるが、自身で2台ピアノ版やピアノソロ版に編曲している。作曲の動機はウィンナワルツに対する礼賛、オマージュであるとされ、ラヴェル本人が初版に「霧の中からワルツを踊る男女が浮かび上がり、シャンデリアの光が輝く。1855年頃のオーストリアの宮廷である。」と書いている。弦楽器のトレモロが霧であり、優雅な雰囲気のワルツが現れてくるが、曲が進むにつれて優雅さが遠のき不気味さが増し、いったん始めの曲調に戻るものの破壊力が増し踊り狂いながら突然終わる。それはウィンナワルツに対する素直な礼讃というより、19世紀の宮廷に代表される優雅な時代の終わりを表現しているとも受け止められる。

シューマン（1810～1856）：謝肉祭 op.9

1834年から1835年の作曲。「4つの音符による面白い情景」との題が付いているが、4つの音符とはシューマンのかつての恋人の出身地アッシュ（ASCH）に由来する音名、A-Es-C-Hのことである。シューマンはこの曲のほとんど（「前口上」と「ショパン」以外）にこの音列を忍ばせている。各曲にはシューマンの空想の人物や団体、実在の人物が登場する。

第1曲 「前口上」変イ長調 堂々とした和音で始まる
第2曲 「ピエロ」変ホ長調
アッシュ（ASCH）の音型がAs-C-Hで現れる

第3曲 「アルルカン」変口長調
道化役者（アルルカン）をアッシュ音型で描写
第4曲 「高貴なワルツ」変口長調
アッシュ音型を変形した優雅な趣きのワルツ
第5曲 「オイゼビウス」変ホ長調
繊細なオイゼビウスはシューマンの分身のひとり
第6曲 「フロレスタン」ト短調
活発なフロレスタンはもうひとりのシューマンの分身
第7曲 「コケット」変口長調 魅力をアピールする女性
第8曲 「返事」ト短調 コケットに対する返事
「スフィンクス」アッシュ音型の謎解き
第9曲 「蝶々」変口長調

プレスティッシモで蝶が飛ぶ素早さを表現
第10曲 A.S.C.H-S.C.H.A（踊る文字）変ホ長調
アッシュ音型による速い3拍子
第11曲 「キアリーナ」ハ短調
キアリーナはのちの妻クララのイタリア風の呼び方
第12曲 「ショパン」変イ長調
ノクターン風のメロディでショパンを描いている
第13曲 「エストレラ」ヘ短調
エルネステイーネ（アッシュ音型の恋人）を意味する
第14曲 「再会」変イ長調 アッシュ音型が躍動的に現れる
第15曲 「パンタロンとコロンビース」ヘ短調
道化のカップルの様子

第16曲 「ワルツ・アルマンド」変イ長調
ドイツ風のワルツ。中間部に「間奏曲」（バガニーニ）ヘ短調が置かれる。クララ・ヴィークの作品を引用している
第17曲 「告白」ヘ短調 情熱的な愛の告白
第18曲 「プロムナード」変ニ長調
ふたりの愛の散策風のワルツ

第19曲 「休憩」変イ長調 「前口上」が再度現れる
第20曲 「フィリシテ人と戦うダヴィッド同盟の行進」
変イ長調 - 変ホ長調 - 変イ長調
フィレシテ人（ベリシテ人）は芸術に興味を持たない無粋な人物、俗物、守旧派の例え。3拍子の行進曲で華麗に曲を閉じる。

チャイコフスキー（プレトニョフ編曲）：組曲「くるみ割り人形」

バレエ音楽「くるみ割り人形」は「白鳥の湖」「眠れる森の美女」とともにチャイコフスキーの3大バレエ音楽と称される音楽界舞踊界の最高傑作のひとつである。初演は1892年マリインスキー劇場において行われた。オーケストラ版組曲はチャイコフスキー自身の手によるものでありクリスマスシーズンのコンサートプログラムにしばしば登場する。

1957年生まれのアナトール・ミハイル・プレトニョフはこの「くるみ割り人形」や「眠れる森の美女」をピアノソロのためのトランスクリプションとして編曲し、多くのピアニストによって演奏されている。「くるみ割り人形」ピアノソロ版は「行進曲」「金平糖の踊り」「タランテラ」「間奏曲」「トレパーク」「中国の踊り」「アンダンテ・マエストーソ」の7曲で構成されている。

（石原良也）